

— 閑話 — 「たね」と「心」について

先月号で記した「魂」と同類の言葉に「たね」があります。この「たね」と魂の関係は、「たね」は魂の核であるというのが筆者の考えです。「元の理」においては、原初泥海の中にたくさんの泥鰯がいた。そして「親神は、どろ海中のどちよを皆食べて、その心根を味い、これを人間のたねとされた」とありますが、泥鰯によって象徴される特性は、無名、無性、無方位、無規定（それ自身の役割を持たない）無数というものです。泥水の中に群生している泥鰯は、あの泥鰯この泥鰯と個体を区別できたり1匹2匹と数えられたりする存在ではなく、また、どちらを向いているのや何をしているのかも分からない存在。雄とも雌とも区別がつかない存在。つまり、「たね」にはこの「たね」あの「たね」という区別がなく、「たね」は一様に等しく「たね」。つまり、「魂」の根元・人間の本来性には何ら区別はなく、すべて同等・平等なのであります。

しかるに、その「たね」を核にしてできた魂には、「○○の魂」と言われるように、名前があり、性別があり、歴史があり、それぞれが個別な役割をもった存在です。別の言い方をすれば、「魂」はそれぞれのいんねんの色合いをもっているということであり、いんねんとは、「魂」の働きに影響する“くせ”であり、それによって、「魂」の働きの傾向が異なってくるのです。

さて、それでは、心とはどういうものか。筆者は「心」は「魂」の働き・作用であると考えています。身体の働きを「動作」といいますが、たとえば、手を上げたり下げたり伸ばしたり縮めたりするすべての動きが動作であって、動作という一つの実体があるわけではありません。それと同じように、「魂」の働きである「心」は、「ころころ変わるから心や」と言われているように、「魂」の作用・動きのことをいうのです。心も「魂」と同じで、これが「心」だという形・質量があるものではないのです。

「心一つが我がの理」という言葉から、「心」イコール「我-主体」と説明されることがありますが、筆者は、「我がの理」の理は、我がそのものではないと考えています。「心」は我という主体に付随するものなのです。言い換えれば、「心」は我がの働きの姿であって、我（主体）そのものではないということ。我がの働きとして現れる理、つまり、「魂」の作用の現れ方の様態が心の動きなのです。

「心の入れ替え」とも言われるので、心が我がの主体と思われられるかも知れませんが、もし、心が我そのものであれば、心を新しいものと入れ替えれば、今の我とは異なる存在・他人になってしまいます。ですから、「心の入れ替え」とは、心の作用・働き方を改革することだと考えた方が理に適うと思うのです。また、「心の成人」というのも同じ文脈で、悪しき心のくせが改まり、“周囲の幸せ、末の楽しみ”を求めるような心の動き方に替わるとのこと。魂の働きの偏向がなくなり、親神の親心に近づくことだと思うのです。

人間には「心の自由」が与えられていると言われ、どんなこ

とでも考えられる自由が認められています。しかし、その心の使い方の自由があるがゆえに、悪しき心遣いをすることも可能である。人間創造の目的たる陽気ぐらしに都合の悪い心を使うことも起きてくる。ですから、心の自由など無い方がよいのではないか。皆が親神の思いに沿う良い心しか使えないように最初からしておく方が、陽気ぐらし世界の実現には都合がよいとの考えも出てくるでしょう。親神の命令一下「右向け右」と言われれば、すべての人間が同じ右方向を向くようになっていけば、何の争い事も起きることなく、世界平和などすぐに実現できるはずだ、とも考えられるのです。

しかるに、もし、人間が心を自由に使うことができなければ、人間は親神のロボットや奴隷のような存在になってしまいます。今でも独裁者が人民の思想・言論の自由を統制して国を支配するような例もありますが、そのような体制下でのマスゲームがいかにも糸乱れぬものであっても、それが出演者の自由意思によるものでなければ観閲者の自己満足にしかならないのです。

人間がテレビや車を作るのは、作る方の人間の楽しみを求めてのことです。しかし、親神様は、作られる方の人間の楽しみを願われるゆえに、人間を無理矢理に支配しようとはなされない。ですから、人間には、主人に絶対服従の孫悟空の“緊箍児”のようなものはつけられていないのです。

「綿花からほこりを取ってきれいな綿にする。その綿を紡いで糸にする時にまたほこりが出る。その糸を織機にかけて布にする時にもまた毛ぼりや糸くずが出る。その反物を着物に仕立てればまた綿ぼりや切れ端がでる。これと同じで、人間の心はいくらきれいになったように思っても、ほこりの出ないということはない。」（衣服の仕立てに譬えて—『改訂正文遺韻』189頁要約）という例話のように、「魂」・人間が活動をすれば必ずくず・ほこりが出ます。動かずにじっとしていればほこりは出ないが、しかし、それでは何の楽しみも湧き出してこないのです。親神は、静止した・動きのない世界は退屈で楽しみがないゆえに人間を創められたのですから、人間は心にほこりがつくのを恐れずに活動をするべしなのです。

自動車でも、動き出した時にハンドルの遊びがなく固定されていけば危険なように、心の自由がなければ人間は前に進めません。心の自由があり、ほこりを出すことが許されていけばこそ人間は精神の安定が保たれるのです。しかし、ハンドルの遊びがありすぎても危険ですから、注意して道からはみ出さないようにすることも必要なのです。言い換えれば、心のほこりが出るのは、心に自由が与えられた代償ともいえるわけで、人間が心を使えばほこりは必ず出るものとして、心のほこりを常にはらっていけばよいのです。

以上、2回にわたって、「魂」「霊」「たね」「心」について述べました。まだまだ思案の足りないところや説明不足のところがあると思いますが、紙幅の都合もあり他日に譲りたいと思います。